

平成27年度

終戦70周年事業

市川市平和学習青少年長崎派遣団 報 告 書



市川市 総務部 総務課

目 次

I. はじめに	1
II. 核兵器廃絶平和都市宣言文	2
III. 市川市平和学習青少年長崎派遣事業概要	3
IV. 終戦 70 周年 平和学習青少年長崎派遣団名簿	5
V. 派遣団の活動記録	8
1. 事前学習	10
2. 長崎派遣	11
3. 派遣後の活動	18
VI. 派遣団員報告	20
1. 派遣団感想文	
報告書	柏熊 夏生 22
長崎で感じたこと	坂本 浩二郎 23
長崎で学んだこと	小山田 海心 24
長崎派遣に行って	一瀬 知恵 25
平和の大切さ	栗原 和紀 26
平和学習青少年長崎派遣を終えて	広瀬 由妃 27
皆が望む平和へ	遠藤 彩夏 28
長崎派遣感想文	澤田 百葉 29
「しっかり語り継いでいきます」	佐久間 遥奈 31
長崎派遣を終えて	吉野 寧夏 32
「長崎の真実」	坂井 悠 33
長崎派遣報告書	稲葉 亜有観 34
長崎派遣に参加して	渡邊 諒子 35
長崎派遣に参加して	宇田川 理加 36
後世へ残す物	堀 開陽 37
「あの日」「あの瞬間」	吉田 桃実 38
平和学習青少年長崎派遣に参加して	井上 勇(市民代表) 40
2. 長崎派遣で一番印象に残ったこと ～団員のスピーチから～	41
3. 平和学習青少年長崎派遣団報告会	43
VII. 参考資料	46
1. 被爆70周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典式次第	48
2. 長崎平和宣言	49
3. 長崎平和宣言＜ことばの解説＞	51
4. 市川市の平和事業	54

はじめに

市川市では、昭和59年（1984年）11月15日に「核兵器廃絶平和都市」を宣言して以来、核兵器の廃絶、生命の尊厳、恒久平和の確立を訴えてまいりました。また、千葉県ではじめての「平和基金」を設立し、様々な平和事業をとおして「平和の大切さ」を、市民の皆様に呼びかけております。

平成27年は、戦後（被爆）70年の節目にあたります。今年、被爆者の平均年齢が80歳を超え、日本の総人口に占める戦後生まれの割合が初めて8割を超えました。このようななか、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の大切さを若い世代に伝えていくことが大切であることから、中学生を長崎市へ派遣いたしました。

市内市立中学校から各校1名ずつ選出された中学生16名、市民代表1名、教職員2名、市職員2名で構成された『市川市平和学習青少年長崎派遣団』は、平成27年8月7日（金）～10日（月）の日程で被爆地長崎を訪れ、長崎市主催の青少年ピースフォーラムをはじめとする平和学習に参加いたしました。

派遣団の中学生は、全国41自治体から派遣された同年代の参加者や長崎市のピースボランティアと共に学び、原爆資料館の見学、平和祈念式典の参列などを経験し、戦争の愚かさ、悲惨さ、そして、平和の大切さをそれぞれが実感しました。この報告書は、平和学習青少年長崎派遣団の活動の一環として、派遣団が長崎で学び、感じたことをまとめ、作成いたしました。

今後も市川市は、核兵器廃絶平和都市宣言に基づき、平和意識の高揚を図るため、平和事業を通して、「戦争の悲惨さ」や「平和の大切さ」をより多くの市民の皆様に訴えてまいります。

核兵器廃絶平和都市宣言

世界の恒久平和と安全は、人類共通の願いである。

この普遍の願いにもかかわらず、核軍備の拡張は依然として行われており、人類は核戦争の脅威にさらされている。

わが国は、世界唯一の核被爆国として核兵器の恐ろしき、被爆者の苦しみを世界の人々に訴え、再び広島、長崎の惨禍を絶対に繰り返させてはならない。

私たち市川市民は、生命の尊厳を深く認識し、国是である非核三原則が完全に実施されることを願い、いかなる国のいかなる核兵器に対してもその廃絶と軍縮を訴え、恒久平和確立のため、ここに「核兵器廃絶平和都市」となることを宣言する。

昭和59年11月15日

市 川 市



市庁舎前の宣言塔・宣言文

終戦70周年事業 市川市平和学習青少年長崎派遣事業概要

1. 事業の目的

長崎市で開催される青少年ピースフォーラムに参加し、全国の青少年とともにフィールドワークや意見交換会など現地での学習を通して、被爆の実相と平和の大切さを知る。

帰市後は平和学習で学んだことを、市・学校・地域で発表するなどして平和啓発活動に寄与する。

2. 主 催 市川市

3. 期 日 平成27年8月7日（金）～10日（月） 3泊4日

4. 派遣団の構成及び派遣人員

(1)中学生 16名（市川市立中学校に在学し、平和学習に関心があり心身ともに健康である者。各中学校より1名ずつ学校長の推薦により決定する）

(2)市民代表 1名

(3)引率者 4名（市立中学校教職員2名、市職員2名）

5. 派遣生徒の役割

(1)オリエンテーション(全3回)、帰市報告会などの会合に出席。

(2)市民から寄せられた折り鶴で千羽鶴を作り、長崎平和公園へ献納する。

(3)派遣終了後、団員の感想文や記録をまとめた報告書を作成する。また、平和学習青少年長崎派遣団報告会に出席し、市民へ向けての報告を行う。

(4)在学する中学校では、派遣団に参加した自らの体験をもとに、感想や感じたことを生徒に伝承するよう努める。

(5)家庭、地域等において機会を捉え伝承していくよう努める。

6. 青少年ピースフォーラム

(1)目 的 全国の自治体が派遣する青少年と長崎の青少年が一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図る。

(2)日 程 8月8日(土)～8月9日(日)

(3)場 所 平和会館ホール、原爆資料館周辺、平和公園

(4)内 容

①被爆体験講話・・・被爆者の体験講話を聴講する。

②班別学習会・・・全国から集まった参加者がグループに分かれ、それぞれ「平和」について語り合い、その考えをまとめ、発表する。

③平和祈念式典の参列・・・平和祈念式典へ参列し、平和への願いを学ぶ。

④フィールドワーク・・・爆心地付近の被爆建造物を巡り、当時の惨状を知り、平和意識をたにする。

⑤交流会の参加・・・参加者が、それぞれの自治体などの平和に関する取り組みや文化などを紹介し、交流と相互理解を深める。

7. おもなスケジュール

- 6月20日(土) 第1回オリエンテーション
〔主な内容〕
① 派遣団員の自己紹介
② 派遣事業の目的・内容について
③ 市川市の平和事業について
④ 派遣事業参加者（平和学習派遣団）としての役割について
⑤ 青少年ピースフォーラムプログラムの内容について
⑥ 今後のスケジュールについて
⑦ 班ごとに事前学習のテーマを決め、次回の発表までにそれぞれ学習する。
- 7月4日(土) 第2回オリエンテーション
〔主な内容〕
① テーマに沿って学習した内容を班ごとにまとめ、発表する。
② 語り部（市川被爆者の会）による被爆体験講話
③ 市民から寄せられた折り鶴で千羽鶴をつくる。（糸とおしなど）
- 8月5日(水) 第3回オリエンテーション
〔主な内容〕
①出発式（代表者の宣誓、教育長からの激励）
②スケジュールなどの最終確認
- 8月7日(金) 出発（市川市役所→羽田空港→長崎空港→長崎市内） 着後、市内見学
8月8日(土) ピースフォーラム1日目 被爆体験講話、フィールドワーク
8月9日(日) ピースフォーラム2日目 長崎平和祈念式典に参列、意見交換会
8月10日(月) 市内見学 長崎市出発（長崎市内→長崎空港→羽田空港→市川市役所）
8月21日(金) 帰市報告会
- 9月～12月 派遣生徒は、在学する中学校で伝承する機会があるときは、この派遣事業に参加した感想など、平和学習で自分が感じたことを発表する。
- 10月11日(日) 平和寄席（任意参加） 市川市の平和啓発事業への参加
- 10月24日(土) 市民を対象にした『市川市平和学習青少年長崎派遣団報告会』
場所：メディアパーク市川内 グリーンスタジオ

終戦70周年 平和学習青少年長崎派遣団名簿

団 長	こ う の 河 野	け ん い ち 謙 一	(市川市総務部総務課主幹)
団 員	い の う え 井 上	い さ む 勇	(市民代表 市川被爆者の会)
団 員	かしわくま 柏 熊	な つ き 夏 生	(市川市立第一中学校 第3学年)
団 員	さかもと 坂 本	こうじろう 浩 二 郎	(市川市立第二中学校 第1学年)
団 員	おやまだ 小 山 田	かいしん 海 心	(市川市立第三中学 第2学年)
団 員	いちのせ 一 瀬	ち え 知 恵	(市川市立第四中学校 第2学年)
団 員	くりはら 栗 原	ほ ず き 和 紀	(市川市立第五中学校 第3学年)
団 員	ひろせ 広 瀬	ゆ き 由 妃	(市川市立第六中学校 第3学年)
団 員	えんどう 遠 藤	あや か 彩 夏	(市川市立第七中学校 第3学年)
団 員	さわだ 澤 田	も も は 百 葉	(市川市立第八中学校 第3学年)
団 員	さくま 佐 久 間	はるな 遥 奈	(市川市立下貝塚中学校 第2学年)
団 員	よしの 吉 野	しず か 寧 夏	(市川市立高谷中学校 第3学年)
団 員	さ か い 坂 井	ゆう 悠	(市川市立福栄中学校 第1学年)
団 員	いなば 稲 葉	あ ゆ み 亜 有 観	(市川市立東国分中学校 第3学年)
団 員	わたなべ 渡 邊	りょうこ 諒 子	(市川市立大洲中学校 第2学年)

団 員 うだ が わ り か
宇田川 理加 (市川市立塩浜中学校 第3学年)

団 員 ほり かい や
堀 開 陽 (市川市立南行徳中学校 第2学年)

団 員 よしだ もも み
吉田 桃 実 (市川市立妙典中学校 第2学年)

引 率 ふじい よし やす
藤井 義 康 (市川市立第七中学校教頭)

引 率 よしざわ ゆ う こ
吉澤 優 子 (市川市立南行徳中学校教諭)

引 率 さかい きよ か
坂井 清 香 (市川市総務部総務課副主幹)



長崎市内にて

派遣団の活動記録



◆事前学習

第1回オリエンテーション 平成27年6月20日（土）

参加する中学生、保護者への平和学習青少年長崎派遣事業の事業説明会を実施しました。平和学習青少年長崎派遣団（以下「派遣団」）の班編成を行い、各班テーマを決めての事前学習がはじまりました。

- 1班「長崎の自然や歴史、文化について」
- 2班「原爆投下から現在まで、永く残る人的被害について」
- 3班「被爆の実相を後世に伝える長崎市や市川市の取り組みについて」
- 4班「長崎に落とされた原子爆弾の被害について」



第2回オリエンテーション 平成27年7月4日（土）

班内で各自調査したことを研究、整理したうえで全体発表を行いました。派遣団の一員(市民代表)の 市川被爆者の会 井上 勇さんの被爆体験講話を聞きました。折り鶴を折り、市民から寄せられたものと合わせてつなぎ、千羽鶴を作りました。



- | | |
|--------|------------|
| 10:00～ | グループワーク |
| 13:30～ | 各班で発表 |
| 14:15～ | 被爆体験講話 |
| 15:00～ | 派遣期間のルール作り |
| 15:20～ | 千羽鶴作り |
| 16:00 | 終了 |



第3回オリエンテーション（出発式） 平成27年8月5日（水）

代表者による宣誓を行い、教育長から激励の言葉がありました。



◆長崎派遣

1日目【8月7日（金）】

9：30 市役所集合

9時45分に市のバスで羽田空港に向け出発しました。

途中、道路の渋滞がありましたが、空港に無事到着し、12時25分発 JAL609便で長崎へ。



14：15 長崎空港到着

この日の最高気温は37度。

大変暑い中での長崎派遣となりましたが、4日間を通じて晴天に恵まれました。



15：50 出島和蘭商館跡 見学

熱心に説明を聞き、メモをとる派遣団員



17：10 ホテル着

夕食後、ミーティング

2日目【8月8日（土）】

8:00 ホテル出発。路面電車に乗って市内見学へ。

午前中は、永井隆記念館、如己堂、山里小学校、原爆資料館を見学しました。



如己堂

永井博士は、友人たちや教会の援助によって建てられた、2畳1間のこの家で、寝たきりとなってもなお、研究や執筆活動を通して平和の大切さを訴え続けました。



あの子らの碑



校舎裏の防空壕跡



永井隆記念館

永井隆博士は、原爆被害により病床に倒れたにもかかわらず、負傷者の救護や原爆障害の研究に献身的に取り組みました。博士の残した書物や「いのち」、「平和の大切さ」を訴えた平和活動の足跡がありました。

長崎市立山里小学校は、爆心地から600メートルのところにあり、多大な被害を受けました。

校内には被爆の跡が残され、平和の尊さを伝え続けています。



原爆資料室

11:00 原爆資料館

原爆資料館にて、原爆投下後の長崎の様子、戦争の悲惨さ、被爆の惨状が残った被爆現物資料やパネル展示を見学しました。



市川市では毎年、市民が折った平和の折り鶴を広島と長崎に送呈しています。市川から送った千羽鶴が原爆資料館に展示されていました。



14:00 青少年ピースフォーラム1日目

開会行事で、中村一俊さんの被爆体験講話を聴きました。(平和会館ホール)



長崎市長挨拶



ピースボランティアによる劇

15:00 被爆建造物等のフィールドワーク

爆心地中心や浦上天主堂を回るコースに参加しました。

爆心地（原爆落下中心地碑）で、ピースボランティアから説明を受けながら被爆建造物等を見学しました。



被爆当時の地層

家の瓦、熱で溶けたガラス、茶碗などがたくさん見えました。



鐘楼ドーム

爆風に吹き飛ばされ、35メートルほど離れたところに落ちた浦上天主堂の鐘楼がそのまま保存されています。



左は、再建された現在の浦上天主堂

18:00 ピースフォーラム交流会

全国から集まった青少年たちが、食事をともにしながら交流を深めました。

学校のこと、平和について、それぞれの地方の文化や方言について、話が弾みました。



20:15 ホテル帰着、ミーティング

ミーティングは毎日行われ、翌日の予定の確認や生活上の注意などの連絡がありました。



3日目【8月9日（日）】

8:00 ホテル出発

9:00 平和祈念式典会場に到着（平和公園）

派遣団員が事前学習で作成した千羽鶴と、市川市民から寄せられた千羽鶴を式典会場の献納台に納めました。



10:35 平和祈念式典に参列

原爆が投下された11時2分には参加者全員で黙とうしました。原爆の犠牲になった方を思い、世界の平和を願いました。

長崎市長の「平和宣言」、被爆者代表の谷口稜暉（すみてる）さんによる「平和への誓い」や長崎の児童たちによる合唱などが行われました。



今年は、式典への参列希望が大変多く、会場に入りきれないため、一部の団員は、サテライト会場（長崎ブリックホール）での参列となりました。



14:00 青少年ピースフォーラム2日目

グループに分かれて、意見交換会を行いました。



「人間知恵の輪」で緊張をほぐした後、グループごとに話し合いました。テーマは「みんなの平和の取り組み」、「どうしてそのような取り組みが行われているのか」「今後、私たちにできることは？」など。色々な意見が聞けて、自分の考えを広げることができました。

15:40 フォーラム終了後、徒歩で山王神社へ。



一本柱鳥居

爆心地側の半分は爆風により吹き飛ばされました。

右) 爆風と熱線で、黒こげ同然となりながら息を吹き返した被爆クスノキ



17:15 ホテル帰着
夕食後、ミーティング

4日目【8月10日（月）】

8:00 ホテル出発
大浦天主堂、グラバー園へ

大浦天主堂

1865年に、長崎居留地内に在留外国人のために建立された、日本最古の木造ゴシック様式の教会で、国宝にも指定されています。



グラバー園

日本の近代化に貢献したトーマス・ブレーク・グラバー氏の旧グラバー住宅は、2015年に世界文化遺産に登録された、「明治日本の産業革命遺産」全23資産のうちの1つです。

園内には、緑や花に囲まれて9棟の歴史的な洋館が点在しています。



旧グラバー住宅

10:26 バスで長崎空港へ

12:50 JAL610便で羽田に向け出発

16:30 市役所到着、解散

◆派遣後の活動

【8月21日（金） 帰市報告会】

事後研修として、派遣団員の中学生は青少年ピースフォーラムの修了証書を総務課長から授与され、教育次長への報告を行いました。

その後、団員がこの長崎派遣で学んだ事を1人ずつ発表しました。



教育次長への報告



青少年ピースフォーラムから届いた修了証を総務課長から授与されました。



1分間スピーチ

【10月11日（日）平和寄席】

市川市の平和啓発事業に参加しました。（任意参加）

「笑いを通じて平和の大切さを実感する」イベントとして、市川市文化会館で毎年行われている平和寄席の会場にて、平和基金への募金の呼びかけ、舞台での派遣報告、ロビーでの長崎派遣のパネル展示を行いました。



【10月24日（土）報告会】

メディアパーク市川グリーンスタジオにて、広島
の原爆を題材とした映画「父と暮せば」の上映会と
合わせて、長崎派遣の報告会を開催しました。

詳しい内容は、43ページから



派遣团员報告

報告書

第一中学校 3年 柏熊 夏生

かつて、長崎の地上約五〇〇メートルの空で、太陽二つ分もの熱量をもった原子爆弾が炸裂しました。その爆弾は熱線と爆風、放射能を伴って、長崎の町に、人々の体と心の奥深くに閃光を放ち、甚大な被害が及びました。

それから七十年が経ち、私達青少年長崎派遣団は、八月七日から十日にかけて長崎へ平和学習に行きました。そこでは、原子爆弾による被害の様々な数値や文字からでは分からなかった實際を、肌で感じることができました。浦上天主堂や山王神社では、熱線や爆風のすさまじい威力を。山里小学校では、私達とあまり年の変わらない子ども達をはじめ、多くの方の人生が一瞬にして断ち切られ、めちゃくちゃにされたこと……。

今、世間では、戦争や原子爆弾が落とされたことが風化しつつあります。しかし、長崎で分かったことがあります。それは、平和について考えたり、戦争があったことを次世代へとつないでいきたいという多くの仲間が確かにいる、ということです。今回は、青少年ピースフォーラムを通してそれを学びました。ピースフォーラムには、北海道から沖縄まで、小学生から社会人までの多くの人に参加をしました。

その中で特に印象に残っていることは、立食をしながらの交流会と、意見交換です。交流会では、他県との文化の違いに驚き、自分の世界が少し広がったような気がしました。意見交換の場では、皆が積極的に意見を交わしました。まず、自分達の住む市や県で行っている平和への取り組みを出し合いました。次に、なぜそのような取り組みを行うのか、また平和へ近づくためには何をしていけばよいのかを話し合います。最後に、自分が帰ってからやりたいことを宣言して終了となりました。自分の考えていなかった意見にもたくさん出会える、よい機会となりました。

この四日間で私は、「平和」という言葉をより重く受け止められるようになりました。今ある平和が築かれる前のことを学び、平和が原子爆弾一つで簡単に壊されてしまうものだと知ったからです。平和な世の中であってほしいと思わない人はいないでしょう。だから私達が長崎で気がついたように、もっと多くの人に、平和のありがたさに気がついてほしい。そしてもう二度と、原子爆弾のようなものが使われることのないようにしたい。そのために、小さい一歩かもしれないけれども、人々に私が伝えていこうと決心しました。

長崎で感じたこと

第二中学校 1年 坂本 浩二郎

僕が、この長崎派遣に参加しようと思った理由は、ニュースや新聞などを見て、日本は戦争に参加する国になってしまうのかと思い、戦争はどのようなものだったかを知りたいと思ったからです。

長崎へ行ってからは、たくさんの場所を見学しました。二日目には、原爆資料館へ行きました。資料館には、「ファットマン」の模型や、原爆の被害を受けた物などが展示されていました。印象深かったのは、11時2分のまま止まってしまった時計、そして、一般客に向けて話していた、ボランティアの方の話でした。その話は、救護活動の話で、「朝鮮語や中国語を話す人は助けなかった」というものです。当時、浦上刑務支所には、朝鮮人と中国人がたくさんいました。この話を聞き、ひどい扱いを受けた彼らは、日本人以上に苦しかっただろうなと思いました。

展示の最後の方には、現代の核兵器についての展示がありました。現在、1万6千発以上の核兵器があり、その威力は、広島・長崎の数百倍ともいわれています。こんなものは絶対に使わせてはいけないと思いました。

青少年ピースフォーラムでは、中村一俊さんの被爆体験講話を聞きました。中村さんは、あの日、母と畑へ行きました。その畑には、同じ年くらいの男の子とその母がいました。母は先に帰りましたが、中村さんは、男の子に遊ぼうといわれ、屋内で遊んでいました。ちょうどその時、原爆が投下されました。母は亡くなり、中村さんはけがもありませんでした。人生というのは、本当に小さなことで、大きく変わってしまうんだなと思いました。

三日目、僕達は平和祈念式典に参列しました。式典では、長崎市議会議長や長崎市長、被爆者代表、そして安倍首相などの話がありました。式典に参列して、感じたことがあります。長崎の方、特に被爆者や遺族が安保法案について、どう思っているかです。市長や被爆者代表が、安保法案について、否定的な発言をすると、遺族席からたくさんの拍手が上がっていました。原爆の被害を受けた長崎では、あの法案は許せないのです。安倍首相も、長崎の声を感じたはずです。首相には日本を平和な国にしていってほしいです。

僕達は、長崎へ行く前に、事前学習を行いました。原爆の被害や、長崎市の取り組みなどを各班で調べ、発表しました。そのときに、「平和って何だろう。」という疑問が生まれました。平和って何？と聞かれても、すぐに自分では答えられないことに気付きました。しかし、この派遣で、平和とは何か、自分の中で答えを出すことができました。

平和は、『戦争がなく、当たり前の生活が当たり前のように送れること』だと思います。

派遣に参加できて、本当に良かったです。

長崎で学んだ事

第三中学校 2年 小山田 海心

僕はこの長崎派遣を通して、平和の大切さ、命の尊さなどを学んできました。

まず、平和の大切さについては、この派遣に行く前も被爆者の方から原爆の話を聞いたりしました。そして自分自身でも、太平洋戦争の映画、特攻隊の事についても学んだりしました。いま挙げた点で全てに共通しているのは、人が死んでいる事です。しかもみず知らずの人間に殺されたりするのです。まず人が死んでしまったら平和はおとずれないと思います。自分が戦争をするかしないか決めるんだっただけでいいにしません。もし戦争が始まったとしても、ぜったいに自分の国を守り、兵隊さんには、自分の命を無だにするなど教えこみます。特攻隊のような、命を無だにさせるような事はしません。そして平和の大切さを世界にうたえたりしていたら、ぼくは平和が自然におとずれると考えています。

次は命の尊さについてです。

若者が命を散らした特攻隊。小さい子供から老人までも殺した原子爆弾。その他にも、たくさんの人々が戦争で命を落としています。当時は学生までが学徒出陣として戦争に行ったり、中学生なども軍需工場などで働かされました。軍需品の生産が優先され、なべやかまなどの金属が徴収されて、国民生活のすみずみまで、戦争の影響がおよびました。第二次世界大戦での全世界の死者は五千万人以上になるとされています。この死者は民間人の方が兵隊より多かったそうです。原子爆弾は長崎だけでも、二十四万人の市民のうち七万四千人が亡くなり七万五千人が傷つきました。長崎市長が平和式典でおっしゃっていましたが、「七十年前に心に刻んだ日本国憲法の平和の理念が今揺らいでいるのではないかという不安と懸念が広がっています。政府と国会には、この声に耳を傾け、英知を結集し、慎重で真摯な審議を行う事を求めます。」とおっしゃっていらっしゃいました。まさにその通りだと思います。僕は政治の事には詳しくないけど、今、結構大変な事になっているのはわかります。自分達の学校で友達の間でも話題になるくらいだから、相当大変な問題だと思います。なのではっきりいってこんなに大変な事が可決されたら、七十年前の日本に後もどりです。自分は七十年前の日本はくるっていると思います。命をすてるのが名誉な事。そんな時代がまたきたら、日本中が大混乱です。日本は唯一の被爆国なのです。このことをしっかりと忘れずに日本の未来を決めてほしいです。

長崎、広島に落ちた原爆。もう被爆者の平均年齢は 80 代です。今回長崎派遣に行って、いろいろな事を学びました。当時の人々は、なにもしていないのに命をうばわれていきました。国がうばったと言っても過言ではありません。なので、戦争という物がどれだけの物かをこの長崎派遣で学びました。これから今回学んだ事を胸に生きて行きたいなと思ったし、伝えていかないと感じました。最後に市役所の方々、引率の先生、他の学校の人達と長崎に行けて本当に勉強になったし、楽しかったです。またこのような機会があったら、参加したいと思いました。

長崎派遣に行って

第四中学校 2年 一瀬 知恵

私は少し、戦争を甘く見ていた。

「戦争の恐ろしさを皆に伝えたい。」

と、思って今回の派遣に参加したのだが、その恐ろしさは想像をあまりにも越えていて、残酷なものだった。

私の印象に強く残っているのは浦上天主堂の爆風によるずれと、中村さんの被爆体験講話だ。どれほど強い風が吹けば遺壁があの様にずれてしまうのか、人間がその場にいたらどうなってしまうのか、想像するだけで恐ろしい。また、ピースフォーラムでは実際に被爆した方の肉声を聞くことができ、資料で見るよりも原爆の悲惨さを感じた。

原爆資料館には止まったままの時計や被爆した人々の痛々しい写真、投下された原子爆弾の模型などがあり、中には見ていて辛くなるような展示物もあった。

フィールドワークでは原爆落下中心地や鐘楼ドームの他、被爆当時の地層など、戦争中の傷痕や状況が生々しく残っているものを多く見学した。

また、今回の派遣では戦争の事だけでなく人との関わりや長崎の歴史や文化を学ぶことができた。事前学習では初めて知り合った友達と意見を交換し合ったり積極的に話しかけたり、自分と同じような意見と意思を持った人と会話ができて良い機会になった。

長崎に着くとすぐに、山が多くて緑豊かな所だと思った。それと同時に七十年前本当にここが火の海になったのか、信じられなかった。市川よりも暖かい長崎は田舎の長閑な風景と、道の真ん中を走る路面電車、沢山の木々などからとても日本らしさを感じた。

戦後七十年という大きな節目を迎えたこの年に派遣に参加できたことを光栄に思う。戦争のテレビ番組でやっていたように、現在戦争について語れる人は少なくなっている。そんな中で私達がピースフォーラムに参加した際、ボランティアとして多くの大学生の人達が平和の尊さを熱心に訴えている姿があった。その時に私は、

「この人達のように、派遣で見聞きしたことをきちんと皆に伝えよう。」

と、これからの未来を担う私達が考えるべき事は戦争を起こさない為に、次の世代、また次の世代へと記憶を継承していくことだと思った。

戦争は二度と起こしてはいけないものだ。国同士の争いによってどれほどの人が亡くなり、どれほどの苦しみを生んだか、一人一人が考え、戦争を過去にしまわず、失敗を基に未来へ繋いでいくことが今の私達にできる最も大きなことだと思う。

四日間で学んだ事、得たものを自分の財産とし、世の中の役に立てばいいと心から思う。そして戦争をする国がなくなることを願っている。大切なのはお金でも権力でもなく、何よりも命だと改めて気付かされた。

平和の大切さ

第五中学校 3年 栗原 和紀

ぼくがこの長崎派遣に参加した理由は、テレビのニュースや学校の授業などで戦争の事を知り、もっと戦争について知りたいと思い学校で配られた派遣の手紙を見て参加しました。

長崎へ行く前に集まりがあり、そこでは、市川市に住んでいて当時被爆した、井上さんの話を聞き当時の悲惨さがよくわかりました。

長崎では被爆した建物などを見て回りました。山里小学校に行きそこでは、色々と回り原爆資料室や防空壕を見て、防空壕は当時のままで入口も狭くて中もすごい暗くて、こんなところに入るなんてすごい怖いと思いました。山里小学校は、爆心地から北へ約 600mの場所にあり、被爆当時の校舎は、現在の運動場の場所にあり、校舎は爆風を受け、3階の部分が崩壊し、1階と2階部分の内部が全焼ですごい被害ができました。

長崎原爆資料館では、当時長崎に落とされた原爆や原爆の熱線の被害にあった物などが展示されていました。その中で印象に残ったのは、当時落とされた原子爆弾の模型を見て色を派手にしていた理由は、落としたときに目立つようにとされた物で実験のためだけに落とすなんてすごいひどいなと思いました。ほかにも写真や熱線で溶けたビンなどが展示してました。

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の中村一俊さんの話を聞き、原爆が落下した当時の町の様子などがすごい伝わり悲惨さがよくわかりました。

そのあとの交流会では、地方から来た人たちと話したりしてすごい楽しかったです。意見交換では、自分の思っている平和の考えをそのまま発表をし、周りの人との意見を交換してみんなも平和についてしっかりと考えているのがよくわかりました。

今回、平和学習青少年長崎派遣団として長崎に行き、この4日間普段体験できない事を、させていただきありがとうございます。

すごくいい経験となりました。

平和学習青少年長崎派遣を終えて

第六中学校 3年 広瀬 由妃

終戦70周年事業である市川市平和学習青少年長崎派遣に参加させていただいた、市川市立第六中学校三年の広瀬由妃です。

この事業に応募させていただいた理由は、私の祖母が満州に疎開している間に、広島に原子爆弾が落とされ、沢山の親戚を失ったと聞き70年前の、この日本で一体何が起こったのか、当時被爆を体験した人は、どのような気持ちだったのか、などを深く知りたいと思ったからです。

まず、長崎に行く前の事前学習でグループの皆で協力し合って調べた「長崎市の取り組み」を意識して、長崎へと出発しました。

現地では、原爆が落とされて被害にあった場所を沢山見学し、被爆当時の悲惨さを痛感しました。

ピースフォーラムでは、日本全国から来た代表生徒と一緒に「その市や学校での平和への取り組み」や「その県で起こった被害」、「平和とは何か」などの意見交換をして、私は、今まで知らなかった事や、自分では考えた事のない意見が生み出されたのが、とても勉強になりました。

平和祈念式典では、テレビでしか見た事のない、平和祈念像を目の前にして、そのイベントの偉大さを改めて感じ緊張しました。

今回の平和学習を終えて、学んだ事は沢山ありますが、その中で、式典での被爆者合唱「もう二度と」という歌や、ピースフォーラムで被爆体験講話を聞いて、本来ならば思い出したくない事なのに、私達が同じことを繰り返さないように、身を粉にして伝えてくださった方々の思いを、自分達が語り継ぎ、二度と戦争が起こらない世の中にしていく事が、私の使命だと感じました。

このような、貴重な経験に参加させていただけた事を、心から感謝しています。

ありがとうございました。

平成二十七年 八月

皆が望む平和へ

第七中学校 3年 遠藤 彩夏

私は長崎派遣事業に参加して、四日間長崎へ行き、さまざまなことを学びました。そして、戦争の悲惨さと平和の大切さは絶対に忘れてはならないと思いました。その理由は主に三つあります。

一つ目は、戦争で投下された原子爆弾により苦しんでいる人達が今もたくさんいるということです。原子爆弾は爆発するときに放射線を発しますが、それを大量に浴びると命を落としてしまうことがあります。また、たとえ生き残ったとしても、白血病などの病気を引き起こし、それにより現在も苦しむ人々がいることを知りました。原子爆弾の投下候補地の中には東京湾もあり、もしかしたら私達の住んでいる地域が被爆地となっていたかもしれない考えると、とても他人事だとは思えませんでした。

二つ目は、戦争の爪跡が現在も残っている場所があるということです。被爆地である長崎市を見学したときに数々の破損した建物を見ましたが、どの建物にも黒くすすけた部分があったり、今にも崩れてしましそうな部分があり、原子爆弾の威力を思い知らされました。

三つ目は、戦争のおそろしさを伝えていくために活動している人達がいるということです。私は長崎で平和学習をしていく中で被爆者の方にお話をさせていただいたり、青少年ピースフォーラムのスタッフの方々に建物の説明していただいたりたくさんの方々にお世話になりましたが、その方達はボランティアでこのような活動を行っています。一体なぜでしょうか。私は、平和を願う気持ちが強く、「二度と戦争をしてほしくない・してはならない」という思いがあるからだと思います。こうした方々の思いや活動が無駄にしないためにも、戦争の悲惨さを忘れず、また、私達が次の世代に伝えていくことが大切だと思います。

私は長崎にいる間、とても貴重な体験をすることができました。これはとても幸運なことだと思います。また、戦争の事を未来へ語り継いでいくために頑張っている方々がたくさんいることも知りました。私も将来、世界が平和であり続けるためにできることはしたいと思ったし、戦後生まれの世代がほとんどの現代で戦争や原子爆弾のことをもっといろんな人達に知ってもらうことができれば、争うことがなくどこの国も兵器を所持していない世界中の人々が本当に望む平和な世界をつくること出来ると思いました。

長崎派遣感想文

第八中学校 3年 澤田 百葉

この長崎派遣では、戦争や平和、核兵器について今まで知らなかったことを知ることができ、改めてそれらのことについて考えさせられました。

まず、如己堂では永井隆博士の自分は白血病に罹り、落とされた原爆によって被爆しながらも、救護活動を行ったり、子供たちのために図書館を作ったりと、人のためにここまでできるなんてすごいと思いました。また、永井博士が作った“うちの本箱”をみることでよかったです。そして山里小学校では防空壕や、“あの子らの碑”などを近くで見ることができ、戦争の跡が今でもしっかりと残っていて、たくさんの人の後世に伝えようとする想いを感じました。山里小学校はそんな戦争の跡が残っているが、普通に生徒がいて、そこで学校生活を送っているのが現在と戦争があった時代をつないでいるように思いました。原爆資料館では、原爆や戦争に関する資料がたくさんあって、どれもその悲惨さを伝えるもので、特に原爆によって焼けたズボンやガラスなどは原爆の被害の大きさが感じられました。ピースフォーラムで聞いた被爆体験は、当時の状況がよくわからない私も、その状況を想像できるくらい事細かに、その当時の話を聞けたので原爆はとても怖いものだと思って思いました。また、その当時から70年も経っているのに、そこまで鮮明に覚えているなんて、それほど大きく、忘れられないほどつらい出来事だったのだと思います。フィールドワークでは原爆による爆風によって、浦上天主堂遺壁がずれているのを見て、こんなに大きなものを動かしてしまうほど爆風が大きかったと思うと、その場にいた人たちはどのように思ったのだろうと考えました。また、下の川では被爆した人たちが水を求めてその中に入ってしまったと聞いて、とても驚き、想像しただけで少し鳥肌が立ちました。しかし、それほど原爆によって多くの人々が苦しめられたのだと感じ、川を見ながら何か重いものが胸に突き刺さるようでした。浦上天主堂では MARIA 像の指が折れているのがわかり、被害の大きさがよく分かりました。そして、そこが人々によって再建されたと聞いて、そのキリスト教の信仰心によって少しでも原爆、戦争による辛い思いを紛らせていたのではないかと私は赤レンガの浦上天主堂を見ながら思いました。平和祈念式典では長崎市長の挨拶をはじめ、被爆者の代表の方の話、内閣総理大臣の安倍総理の話など、それぞれの立場からの戦争や平和についての考えや、これからについての話を聞くことができたので、とても勉強になりました。ピースフォーラムでの意見交換では、いろいろな地域の自分と同じくらいの年の人たちと、平和について話し合うことが出来たので、いろいろな視点で改めて核兵器や戦争、平和などを考えることができました。本当に意見は人それぞれで、自分の考えの幅も広がり、日本各地で行われている平和活動も知る事が出来たのでよかったです。

私は長崎に行くのも初めてで、今まで戦争や核兵器はとても怖いものだとはわかっていても、それらについて深く考えたことがありませんでした。しかし、今回それらについてその恐ろしさや、平和な環境の中で生きていられることが、どれほど幸せなことかを実感しました。また、実際に戦争や原爆による被爆の跡を見る事によって、

改めてその恐ろしさを肌で感じることができました。また、戦争に関する場所には至る所に折鶴があり、たくさんの人の平和を願う気持ちが込められているのではないかと思います。本当に、初めて見たものや、知ったこと、改めて考えたことがたくさんあり、貴重な体験が出来たと思います。

「しっかり語り継いでいきます」

下貝塚中学校 2年 佐久間 遥奈

私は戦争の悲惨さを目のあたりにし、これから先も平和な世の中であってほしい。その為には私達が次の世代の語り部にならないと深く強く思い市川に帰ってきました。そしてこの四日間の長崎派遣が、これから語り継ぐ者としての一歩だと感じています。今、もっと聞きたい、知りたいという気持ちでいっぱいです。

原爆資料館では、11時2分で止まった柱時計が70年前の過ちをはっきりと刻んでいました。事前学習で調べた爆風、熱線、放射線による被害が、ありのままの姿で残されていて胸が苦しくなりましたが、二度とこんな事があってはいけないと教えられました。原子爆弾ファットマンを前に、こんな物を作らなければ、使わなければ、と悔しい気持ちがこみ上げてきました。

フィールドワークでは、それぞれの被爆建造物の所でボランティアの方が調べた事を、真剣に教えてくれたので、語り部としての心構えも学べました。

ピースフォーラムでは、被爆体験講話で当時12歳だった中村さんのお話を聞き、「戦争は、建物や町、人を破壊するのではなく、心に深い傷を残すもの。」と語っていたのが印象的でした。

六月の事前学習のときは、調べれば調べるほど辛すぎるばかりで、原子爆弾の恐ろしさを正直私は受け止められませんでした。けれども実際に長崎を訪れて気持ちが180度変わりました。それは、知る事が怖いのではなく、知らない事が一番怖いと学び、自分の目で見て、聞いたことを正しく学校みんなに伝える重大な使命があるとわかったからです。

8月9日平和記念式典に参列させて頂きました。長崎市長の平和宣言の中で何度も力強い拍手が湧きあがりました。長崎の人達は核兵器のない平和な世界を心から願っています。11時2分黙とう「この先、日本がどんな状況になろうとも、ぶれることなく、世界でただ一つ原子爆弾を落とされた国として核兵器をなくすように、世界に必ず訴えていきます。」と誓いました。

今年で戦争体験者の平均年齢が80才を越え焦りや不安の声をたくさん聞きます。でも、大丈夫です。私達がしっかりと語り継いでいきます。安心してください。

長崎派遣を終えて

高谷中学校 3年 吉野 寧夏

私は八月七日から八月十日まで、戦争について長崎に行き学びました。戦争を体験した人が戦争を知らない私たちに、また、戦争について学んだ私達から自分の周りの人達に、伝えていくために長崎に行きました。

青少年ピースフォーラムでは、北海道から沖縄までのたくさんの子供が集まり意見を交換しました。広島や長崎では、八月六日と八月九日は、学校に行き、戦争について考えたりするという意見を聞きました。沖縄では、自宅で家族と戦争や平和について話し合うということを知りました。それを聞いて私は、市川市のように戦争のことを学校の授業だけで学ぶ所もあれば、そのような特別な日に、その地域であった戦争について勉強をしている所もあるのだなと思いました。また、班で平和について話している時に、人それぞれ平和の感じ方が違うことに気が付きました。争いがない事が平和だと思う人もいれば、みんなが平和だと思う人もいました。さらに、ピースフォーラムの中で被爆された中村さんの話を聞きました。中村さんは戦争中、父と再会できたら水を渡しにくると小さい子どもと約束したそうです。しかし、再会して戻ってきた時には、すでに亡くなっていたという話が一番心に残りました。その被爆された中村さんは、もし今その子どもに会えたら、水をあげても亡くなっていたと思うから最後の願いを聞いてあげられなくてごめん。と謝りたいと言っていました。もし、あの時代に私が生きていて、中村さんと同じ立場に立ったら、中村さんと同じように家族に会いに行くという行動をとっていただろうと思いました。

八月九日には、式典にも参加し、平和への誓いなどを聞きました。平和への誓いでは、被爆された方が、もう二度と戦争は起こしてはいけない、核兵器を全世界からなくさなければ平和はこないという話をされていました。黙祷の時は、あたりは静まり、平和への鐘が鳴り響いていました。また、被爆された方々の歌はとても力強かったです。

もし、あの時代に私が生きていたら、私は死んでいたかもしれません。明日死んでしまうかもしれないと怯えながら生きる時代に、私は生まれなくて良かったと思います。今この平和があるのは、あの残酷な戦争があったからだと思います。だからこの平和がずっと続けばいいなと思います。今回このような貴重な体験をして、命の尊さや、戦争の悲惨さを身をもって体験することができました。また、今平和であることに感謝したいです。

「長崎の真実」

福栄中学校 1年 坂井 悠

今から七十年第二次世界大戦中に長崎と広島の二ヵ所にアメリカの核兵器リトルボーイとファットマンこの二つの核兵器が日本人二十一万人以上の罪のない一般市民が殺されました。今の核兵器はリトルボーイやファットマンに比べて二千倍強いといわれています。その核兵器がロシア、アメリカ、中国、イギリス、フランスなどの国をあわせて世界に一万五千発以上の核が保有されており、核保有大国はロシアとアメリカですが日本も保有しています。日本は核を作る大きな材料のウランとプルトニウムのうち日本は核を七百個作れるほどのプルトニウムを保有しています。もしも日本が七百個作ったらその数は世界第三位にもなります。そしてその一万五千個もの核を国の数でわってみると一カ国につき約八十個の最新核ミサイルがふりそそぐことになります。僕達が長崎に行った目的は青少年ピースフォーラムに出席することです。二日目の八月八日には被爆者のお話などをきいて別の場所にて同じようにあつまった。小学生、中学生、高校生、大学生の代表が北海道から沖縄まで集まりごはんを食べながら交流しました。そして三日目の八月九日長崎の平和公園でおこなわれる平和祈念式典に出席しました。平和祈念式典では市川市民からよせられた千羽鶴を4束けんのうしました。そして金属たんちきのゲートをくぐりぬけて会場に入りました。祈念式典では内閣総理大臣の安倍首相やシンガポールから来た人や市長などが来席しました。そして二日目の青少年ピースフォーラムでは他の県から来た代表と意見交換をしました。山王神社という所では原爆の被害を受けてとりいが半分くずれてしまい片方でたっているとりいを見学しました。あらためて長崎に行って見てわかったこと。それは核兵器は罪の無い人がいっしゅんでまっさつされると思いました。被爆者の人は僕達にこうといかけました。みなさんは家族がいますよね？その家族がいきなり原爆にあい自分だけが生き残ったらみなさんはどんな行動をしますか。とといかけました。世界で一万五千発以上の核ミサイルや核兵器が保有されています。そんななか日本は他国にひかく三げんそくという核兵器を、持たず、作らず、持ち込ませずというキーワードを使って他国に核兵器のはいきを訴えています。これからも核兵器を持たせないために努力してほしいと僕は身を持って実感しました。

長崎派遣報告書

東国分中学校 3年 稲葉 亜有観

私達長崎派遣団は、長崎のさまざまな地の見学、全国の方と交流をするピースフォーラムの参加、平和祈念式典の参列を通し、貴重な体験をしました。

一日目は、出島見学をしました。出島に到着するまでの間、緑がたくさんあったり、路面電車が走っていたりと、市川との違いがいくつもあり、とても新鮮は気持ちになりました。出島では、教科書だけでは伝わらない、出島から全国への大きな影響力を感じることができました。二日目は、如己堂や山里小学校、原爆資料館、被爆建造物の見学、ピースフォーラムでの交流会に参加しました。如己堂では永井隆博士という有名な方のことを知り、山里小学校にあった防空壕や原爆資料館、被爆建造物を見学して、改めて原爆の恐ろしさ、命の尊さを感じることができました。交流会では、北から南までのさまざまな地域からいろいろな年齢の方が集まり、それぞれの地域の話や言葉の違い、食べ物についてなど、たくさん話をしました。新しい発見があったり、新しい友達もでき、とても楽しい交流会でした。そして三日目は、平和祈念式典への参列、ピースフォーラムの意見交換会の参加をしました。平和祈念式典では、市長や県知事、首相、各国の代表の方々も参列していて、改めて大切な式なのだと感じました。十一時二分に行われた黙祷では、七十年前にこの場所で多くの尊い命が一瞬にして亡くなってしまったのだなと思い、涙が出ました。何年経っても忘れてはいけないものなのだと、強く感じました。交流会では、他の地域で起きていた戦争の被害や、各地で行われている平和への取り組みについて知ることができ、自分の考えを広げることのできた会でした。最終日は、大浦天主堂とグラバー園の見学をしました。それぞれ長崎の大切な過去があり、それに少しでも触れることができ嬉しかったです。

この四日間のさまざまな活動を通して、一番強く感じたことは、戦争やいじめなど、人が人を傷つけてはいけないということです。原爆資料館で見た被爆者の証言や、被爆者の方のお話から、一つ一つの命はとても大切なものであり、その人自身だけでなく、その人の周りの人にとっても大切なものだということがわかりました。今を生きる人々は、過去に起きた戦争などのことをもっと知り、絶対にしてはいけないのだなという気持ちを持つことが必要なのだと思いました。改めて、平和の大切さを感じた四日間でした。

長崎派遣に参加して

大洲中学校 2年 渡邊 諒子

一九四五年 八月 九日 十一時 二分

この時、長崎にファットマンと呼ばれる原子爆弾が落とされました。たった一発で市の人口のおよそ三分の一にあたる七万人が亡くなったということを聞き、とても恐ろしいものだと思います。

「戦争は、命や財産を奪うだけではない。人の心にも深い傷を与える。だから二度と戦争を起こしてはいけない。」

この言葉は戦争を体験した方からの話を伺った時に聞いた言葉です。なぜ普通に暮していた一般市民が殺されなくてはならなかったのか。このように問いかけられても、私は答えることができないと思います。

この派遣に参加するまで、深く「平和とは何か」について考えることはありませんでした。ただ単に戦争のない世界が平和だと思っていました。しかし実際に長崎に行ったり、被爆者の話を聞いたりしたことによって考え方は変わりました。

「普通にご飯を食べ、勉強し、好きなことをして、寝る。これをあたりまえのようにして暮していけることが平和なんだ。」と。

自分達は普段、あたりまえと思って行っていることが戦争中にはできなかったこと…と考えると平和だなと感じます。

世界には、一万六千発以上の核兵器があると言われています。なぜ核兵器はなくなるのか、と校長先生に聞かれる事がありました。その時自分は答えにとまどってしまいました。今の自分だったら、

「自分の国の安全を保つため、つまり守るため。」

と答えると思います。この事は、原爆資料館で学びました。

「核兵器を世界からなくせ！」

これは、原爆の被害者の方々の願いだと教わりました。この事を知り、自分一人では何もできないけれど、自分にも何かできることはないのだろうか考えるようになりました。

「平和とは何か。」の答えが分かった今、平和であるものをこれからもたくさん見つけて、失うことのないようにして行きたいと思いました。

戦争が二度と起きないように、原爆が二度と落とされないように、新たな被爆者が出ないように、平和がこれからも続いていくことを望みます。

長崎派遣に参加して

塩浜中学校 3年 宇田川 理加

一日目の出島見学では、出島の歴史、文化にふれられたのでとても良い経験になりました。

二日目の市内見学の永井隆記念館、如己堂見学では、永井隆博士の心の強さに感動しました。理由は、不自由な体で平和を祈り、本を書き続けたからです。次に行った山里小学校の防空壕では、当時に近い状態で残っていて少し怖かったです。市内見学終了後、長崎原爆資料館の見学では、原爆投下直後の長崎の惨状を再現していたり、投下前の長崎の街や風景を展示していたり、とても怖かったけど、勉強になりました。昼食後、青少年ピースフォーラム開会行事での、被爆体験講話では、とてもざんこくだったので、深く心に残りました。中でも火傷や怪我でとても人にみえないものだったという所が衝撃的でした。その後のフィールドワークでは、実際に歩いて被爆した建物や物を見ました。被害の実態をこの目で見れたのでとても学びました。その後の交流会では、他の県の人達と色々お話ができ、友達もできました。

三日目は、千羽鶴を献納し、平和祈念式典に参列しました。長崎に原子爆弾が投下されて 70 年という節目の年に参列できて貴重な体験になりました。昼食後、青少年ピースフォーラム最終日、平和学習に参加しました。平和学習では、グループに分かれ、平和についての意見交換をしました。自分と違う意見が聞けて、とても充実した意見交換になりました。その後、山王神社を見学しました。そこでは、一本柱鳥居、被爆クスノキを見ることができました。被爆クスノキの生命力におどろかされました。

四日目は、大浦天主堂、グラバー園を見学しました。国宝である大浦天主堂が見れて良かったです。グラバー園では、もう少し勉強して行けば良かったなと思いました。

この旅に参加して戦争のない平和な世の中にするためには私はなにができるのかを考える機会ができました。これからは、世界の恒久平和を祈り、自ら考え、行動しようと思いました。

後世へ残す物

南行徳中学校 2年 堀 開陽

今から七十年前、昭和二十年八月九日、「ピカッ！」と光った後に、長崎の町では何も残っていませんでした。僕達は当時の環境や暮らしなどを調べるために長崎に行きました。

長崎原爆資料館には当時のままの状態の衣服や建物の一部、家具などがありました。そのほとんどは、黒く焦げていたので当時の状況がとても過酷だったという事が、大変わかりました。自分だったらとても耐えきれないと思います。広島や長崎で使われた核兵器は今でも世界中に何百発、何千発もあります。そのため、僕達は今、どうしていけばいいのか、どうすればなくなるのかを考えていき、それを実行していくべきであると思いました。長崎の原爆被害はとてもひどく、爆心地から五百m・千mはほぼ全て焼き滅んでいて、そこにいた人々は、爆破の威力がとても強く死んでしまったり、爆風で飛んできたガラスが刺さったり、皮膚が焼けただれたりして目を覆うような光景でした。中にはあまりの熱さに「水をくれ、水をくれ。」と倒れながらも必死に叫ぶ人もいました。長崎には、造船所や製鋼所、兵器製作所などの工場が多く集まっていた為、アメリカは長崎に原爆を落としたと言われています。長崎に落とされた原爆は「ファットマン」と呼ばれていて、長さ三．二五m、直径一．五二m、重さ四．五トンで火薬を使った爆弾が二万一千トンとも言われています。広島型原爆の「リトルボーイ」と呼ばれている原爆より長崎型原爆の「ファットマン」と呼ばれている原爆のほうが威力がより強いと言われています。

山里小学校では三つもの防空壕があり、アメリカの空襲から防空壕に逃げてきた人が多く、中ではぎゅうぎゅう詰めになって、とても過酷だったのたなあと見て、わかりました。

今回の平和学習では、戦争の悲惨さや過酷さ、被爆者の方々の辛く悲しい気持ちを感じとる事ができました。僕達は、後世へ残す物として、戦争の悲惨さを語り繋いでいくと共に、戦争の無い平和な世界にする為に、一人一人が自覚を持って生きていく事が大切だと思います。最後に、今回の平和学習に携わったすべての方々に感謝します。ありがとうございました。

「あの日」「あの瞬間」

妙典中学校 2年 吉田 桃実

長崎派遣二日目、午前中は長崎原爆資料館、午後は被爆体験者の話をききに行きました。この2つは私の心にとっても強い衝撃を与えました。資料館では被爆者の遺品や物の残骸を見ました。入口では、汚れた防災頭巾が目に入りました。持ち主はたった3歳で命を失いました。幼いながらも頭巾を手離すことはなかったそうです。私はこんな小さい子の命も原爆は奪ってしまうのか、と思いました。奥へ入ると11時2分で止まっている時計がありました。部品も取れ全体的にぐにやりと曲がっていました。しかし、針はしっかりと置いてまるで「あの瞬間」を刻みこむようでした。また、やでどを負った人達の写真やその人達の体の一部分を型どった物もあり、写真は背中が酷たらしく赤い肉が見えていました。顔半分がやけぐちゃぐちゃになっている人もいました。型取りは治ってもつっぱっていたり、放射性のかたまりができていたりして、完璧に治ることはなく元の姿には戻らないのか。と思い怖くなりました。熱線を浴びた物は黒くこげ、とけたりしていて、服もこげ、ガラスが刺さった跡や血跡があり着ていた人がどうなったのかと思うとぞっとしました。原爆は人の体をむしばみ酷いことをするのだとあらためて感じました。

「今でも後悔し夢に見る。」私はこの言葉をきいた時、原爆は体だけじゃなく人の心も大きく深く傷つけるのだと思いました。被爆体験者の中村さんは、家族を6人失いました。あの日には母親の手伝いで爆心地から1800mも離れている所へ母親と一緒にお米をもらいに行ったそうです。用を済ませ帰ろうとした時、その家に居た男子、名前をわけやま君といいその子に「遊ぼう。」と誘われたそうです。一度断りましたが、わけやま君は必死で誘い中村さんは特攻人形と引き換えに遊ぶことにしました。母親は先に帰ることにし、「早く帰ってきなさい。」と言いつつ残りました。この言葉は最後の言葉になりました。しばらく遊び一休みしようとした時、ピカッドーンとやられ、中村さんは気を失いました。しばらくし、目を覚まし周りを見回すと真っ暗なので、わけやま君を呼ぶと奥の方から返事がしました。爆風で奥の方へ吹き飛ばされてしまったのです。風圧は爆心地に近づくにつれ強くなり木に人がささっていたこともあったそうです。

中村さんがはって外へ出ると一変して火柱があがっていました。あわてて父親のいる南へ1人で向かいました。その途中決して忘れられない出来事に出会いました。中村さんが海へ出た時少年に「水をちょうだい。」と言われました。けれど中村さんはすれ違いを恐れ「また来る。」と約束し立ち去りました。中村さんは今でも後悔し、夢にも見ると語っていました。父親と会い戻ってくると少年の所にはハエの大群が。嫌な予感がし、近寄ってみると少年は息絶えていました。その後母親を探しましたが見つからず、弟達は黒くこげて死んでいたそうです。

中村さんは「核兵器を全てなくしたい。」という思いから体験を語ってくださいました。私もこの話をきき決して中村さんのような人をだしてはいけないと感じました。その後の活動でその思いは強くなりました。戦争は人事ではありません。70年前起

こり今でも起こっていることです。もうこんなまちがいを繰り返さないよう「あの日」「あの瞬間」のことを次の世代に伝えていきたいと思います。

平和学習青少年長崎派遣団に参加して

市民代表 井上 勇

市川市では昭和59年に「核兵器廃絶平和都市」を宣言し、この宣言に基づく平和意識の啓発と高揚を図る為、様々な平和事業を実施しています。

その一つとして「戦後・被爆70周年」と云う記念する年に「平和学習青少年長崎派遣団」を結成し、長崎市で開催される青少年ピースフォーラムに参加することになりました。

そこで全国の青少年達とフィールドワークや平和交流会等を行ない、亦爆心地付近の被爆建造物を巡り原爆の惨状を知り、原爆資料館を見学し原爆被爆の悲惨と核兵器の恐ろしさを目の当たりにしました。

参加した16名の中学生達は陳列されている原子爆弾の高熱で変形した品々を強烈な眼差しで喰い入らんばかりの真剣な態度で観察していました。

彼等は被爆の実相を知り、平和の大切さを誰よりも深く学んだ事と意を強くしました。

願わくば、帰宅後は一人でも多くの人達に平和学習で学んだ「平和は宝」である事を強調し「平和の使者」となれん事を唯々祈るばかりです。

處で、70年前の小生と同じ年頃のこの16名達は大きな夢と希望に向かって邁進している為か、目がキラキラ光り輝き綺麗でした。

それに引き替え小生の中学生時代は「欲しがりません勝つまでは」のポスターが至る所に貼ってあり、中学2年生に進級すると「学徒動員」の名の元、勉強は中止、学校は兵器産業の工場と化し、職工さんより仕事を教わり、朝早くから夜遅く迄油にまみれた作業服を着て、お国の為だと云って工員として働かせられました。

然も小生が中学3年生の時、長崎で原爆落下その爆風で校舎の硝子窓の硝子が全壊し、その破片が小生の身体に喰い込み(8ヶ所)、九死に一生を得た年令が14才でした。

16名の子供達と行動を共にしていると、フト70年前の自分と比較し、当時はろくに食べるものも無く、毎日毎日生き地獄と闘っていた頃が急に蘇ってきて「平和であると云う事が如何に大切であるか」思い知らされます。

被爆者の一人である小生は84才の老人ですが、誰よりも声を大にして文字通り老骨に鞭打って「戦争の恐ろしさ」、「原爆の悲惨さ」を語り続け、孫達や未来の子供達の為に今後どんな理由があろうとも「戦争絶対反対」の文字を心に刻み込みました。

最後に、此の度の平和学習青少年長崎派遣団の市川市民代表として参加させて頂きましたことに、唯々衷心よりお礼を申し上げます。

長崎派遣で一番印象に残ったこと ～団員のスピーチから～

ホテルの部屋や帰りのバスで引率の先生が収録した、団員の長崎派遣の感想です。

柏熊団員（第一中学校）

ピースフォーラムでの意見交換。緊張したが、全国から来た友達と平和について様々な意見を交わして、自分で考えてもみなかった意見が出てきたこと。

坂本団員（第二中学校）

原爆資料館に行ったときに見た写真資料に衝撃を受けた。顔の横がケロイドで盛り上がっていて人ではないようで、手術後にも跡が残っていたこと。

小山田団員（第三中学校）

フィールドワークで、ピースボランティアが1人でグループを引率していたが（他グループは2人）、面白かったこと。

一瀬団員（第四中学校）

フィールドワークで落下中心地を訪れ、落下当時の地表が3～4千度であったと聞いたこと。交流会で全国の友達と色々な話をして、色々な都市の文化や風習に触れることができたこと。

栗原団員（第五中学校）

ピースフォーラムでの意見交換。昔の悲惨さや、これからどのようなことをしていくのかについて、よく話し合いができた。

広瀬団員（第六中学校）

下の川。70年前、この場所に、やけどをしたりのが渴いた人がたくさん集まり、たくさんの方が亡くなられたと聞いて、心に響いた。ピースフォーラムでは他県の同じくらいの学年の子たちの平和についての意見をたくさん聞いた。

遠藤団員（第七中学校）

平和祈念式典に参加して、合唱や平和宣言を聞いてあらためて平和の大切さを勉強した。

みんなと仲良くすることができた。

澤田団員（第八中学校）

ピースフォーラムでの意見交換会。いろんな地方から来た同じくらいの人と平和について意見を交換することができた。自分だけではなく、いろんな人の視点からの戦争や平和について聞いて、いろんな発想が自分の中に入ってきた。いろんな地方から来ているので、地方ごとの活動も聞くことができた。日本全国で、平和についてどれくらい考えられているのか実感することができた。

佐久間団員（下貝塚中学校）

ピースフォーラムの交流会。自分が住んでいる以外の県の人と一緒に平和について話し合うことで、より考えを深めることができた。

吉野団員（高谷中学校）

被爆体験講話を聞いたこと。特に心に残ったのは、水が欲しいと言った男の子を置いていき、あとからお父さんと戻った時にはその子が亡くなってしまっていたこと。

坂井団員（福栄中学校）

道を歩いている時に、憲法 9 条のことなどを書いた旗を持った被爆者の人に話しかけられたこと。交流会で沖縄県から来た同じ陸上部の人と部活のことや、平和について話したこと。

稲葉団員（東国分中学校）

印象に残っているのは、原爆資料館で見た、被爆された方がその時のことを振り返って書いた文章。家族を急に失って一人になってしまって寂しいなど、その人たちの思いが書いてあり、印象に残った。

渡邊団員（大洲中学校）

爆風によって、ずれてしまった浦上天主堂の壁。爆風がそこまで大きな力をもっているのだと思い怖くなった。

宇田川団員（塩浜中学校）

被爆体験講話。人の皮膚が剥がれ落ちて、人が人ではないように見えたという話が印象に残っている。

堀団員（南行徳中学校）

ピースフォーラムの意見交換会でいろんな県の人と戦争のことについて意見交換したこと。いろんな意見があり、参考になった。

吉田団員（妙典中学校）

永井隆記念館に行ったこと。放射能は、使い方を考えれば便利なのに、兵器などに使うととてもひどい被害になり、人を徐々に苦しめていく怖い物質であると思った。

市川市平和学習青少年長崎派遣団報告会

平成27年10月24日（土） メディアパーク市川内 グリーンスタジオ

市民に向けての報告会として、それぞれが長崎派遣で感じたこと、考えたことを4人の団員が代表して発表したあと、1人ずつスピーチを行いました。

一瀬団員（第四中学校）からは、「事前学習」について発表しました。

- ・各班で学習したテーマと内容
- ・被爆体験講話を聞き、折鶴を折ったこと
- ・長崎に着いたとき、緑豊かな風景と、歴史や文化を感じられる街を見て、70年前の出来事が信じられない思いだったこと。



吉田団員（妙典中）

主にフィールドワークや市内見学など、「見て」学んだことについて。

- ・被爆当時の、茶碗やガラス瓶の埋もれた地層を見て、普通に暮らしていた人たちが一瞬にしてその日常を奪われたことを痛感したこと。
- ・被爆者でありながら、他者の救助に尽力した永井隆博士に心を打たれたこと。



渡邊団員（大洲中）

被爆体験講話やピースフォーラムでの意見交換会で「聞いて、話して」学んだこと。

- ・「戦争は命や財産だけでなく、人の心にも深い傷をあたえる」という話が印象的だったこと。
- ・意見交換会では、たくさんの意見が出され、自分がこれまで気付かなかった意見や考えに触れることができたこと。



佐久間団員（下貝塚中）

平和祈念式典に参列したことで長崎派遣で考えたこと。

- 黙とうをしたとき、唯一の被爆国として世界に核兵器をなくすよう訴えていこうと心に誓ったこと。
- 普通に生活出来る幸せ、又、戦争を語り継ぐために頑張っているひとがたくさんいることに気づいたこと。



一人ずつスピーチ



教育次長の講評

参 考 資 料

平成27年8月9日
August 9, 2015

被爆 70 周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

The 70th Nagasaki Peace Ceremony

=====

式 次 第		Program
被爆者合唱	1 0 : 3 5	Chorus by A-bomb Survivors
開 式	1 0 : 4 0	Commencement
原爆死没者名奉安	1 0 : 4 0	Laying to rest of the list of victims who died during the past year
式 辞	1 0 : 4 2	Opening address
献 水	1 0 : 4 6	Water offering
献 花	1 0 : 4 8	Flower offering
黙 と う	1 1 : 0 2	Silent prayer
長崎平和宣言	1 1 : 0 3	Nagasaki Peace Declaration
平和への誓い	1 1 : 1 3	Pledge for Peace
児 童 合 唱	1 1 : 1 8	Children's chorus
来 賓 挨 拶	1 1 : 2 3	Addresses
合唱 千羽鶴	1 1 : 3 8	Chorus "A Thousand Paper Cranes"
閉 式	1 1 : 4 3	Closing words

=====

長 崎 市

City of Nagasaki

長崎平和宣言

昭和20年8月9日午前11時2分、一発の原子爆弾により、長崎の街は一瞬で廃墟と化しました。

大量の放射線が人々の体をつらぬき、想像を絶する熱線と爆風が街を襲いました。24万人の市民のうち、7万4千人が亡くなり、7万5千人が傷つきました。70年は草木も生えない、といわれた廃墟の浦上の丘は今、こうして緑に囲まれています。しかし、放射線に体を蝕まれ、後障害に苦しみ続けている被爆者は、あの日のことを1日たりとも忘れることはできません。

原子爆弾は戦争の中で生まれました。そして、戦争の中で使われました。

原子爆弾の凄まじい破壊力を身をもって知った被爆者は、核兵器は存在してはならない、そして二度と戦争をしてはならないと深く、強く、心に刻みました。日本国憲法における平和の理念は、こうした辛く厳しい経験と戦争の反省のなかから生まれ、戦後、我が国は平和国家としての道を歩んできました。長崎にとっても、日本にとっても、戦争をしないという平和の理念は永久に変えてはならない原点です。

今、戦後に生まれた世代が国民の多くを占めるようになり、戦争の記憶が私たちの社会から急速に失われつつあります。長崎や広島の実験だけでなく、東京をはじめ多くの街を破壊した空襲、沖縄戦、そしてアジアの多くの人々を苦しめた悲惨な戦争の記憶を忘れてはなりません。

70年を経た今、私たちに必要なことは、その記憶を語り継いでいくことです。原爆や戦争を体験した日本、そして世界の皆さん、記憶を風化させないためにも、その経験を語ってください。

若い世代の皆さん、過去の話だと切り捨てずに、未来のあなたの身に起こるかもしれない話だからこそ伝えようとする、平和への思いをしっかりと受け止めてください。「私だったらどうするだろう」と想像してみてください。そして、「平和のために、私にできることは何だろう」と考えてみてください。若い世代の皆さんは、国境を越えて新しい関係を築いていく力を持っています。

世界の皆さん、戦争と核兵器のない世界を実現するための最も大きな力は私たち一人ひとりの中にあります。戦争の話に耳を傾け、核兵器廃絶の署名に賛同し、原爆展に足を運ぶといった一人ひとりの活動も、集まれば大きな力になります。長崎では、被爆二世、三世をはじめ、次の世代が思いを受け継ぎ、動き始めています。

私たち一人ひとりの力こそが、戦争と核兵器のない世界を実現する最大の力です。市民社会の力は、政府を動かし、世界を動かす力なのです。

今年5月、核不拡散条約（NPT）再検討会議は、最終文書を採択できないまま閉幕しました。しかし、最終文書案には、核兵器を禁止しようとする国々の努力により、核軍縮について一歩踏み込んだ内容も盛り込むことができました。

NPT加盟国の首脳に訴えます。

今回の再検討会議を決して無駄にしないでください。国連総会などあらゆる機会に、核兵器禁止条約など法的枠組みを議論する努力を続けてください。

また、会議では被爆地訪問の重要性が、多くの国々に共有されました。

改めて、長崎から呼びかけます。

オバマ大統領、そして核保有国をはじめ各国首脳の皆さん、世界中の皆さん、70年前、原子雲の下で何があったのか、長崎や広島を訪れて確かめてください。被爆者が、単なる被害者としてではなく、“人類の一員”として、今も懸命に伝えようとしていることを感じとってください。

日本政府に訴えます。

国の安全保障は、核抑止力に頼らない方法を検討してください。アメリカ、日本、韓国、中国など多くの国の研究者が提案しているように、北東アジア非核兵器地帯の設立によって、それは可能です。未来を見据え、“核の傘”から“非核の傘”への転換について、ぜひ検討してください。

この夏、長崎では世界の約150の国や地域の子どもたちが、平和について考え、話し合う、「世界こども平和会議」を開きました。

11月には、長崎で初めての「パグウォッシュ会議世界大会」が開かれます。核兵器の恐ろしさを知ったアインシュタインの訴えから始まったこの会議には、世界の科学者が集まり、核兵器の問題を語り合い、平和のメッセージを長崎から世界に発信します。

「ピース・フロム・ナガサキ」。平和は長崎から。私たちはこの言葉を大切に守りながら、平和の種を蒔き続けます。

また、東日本大震災から4年が過ぎても、原発事故の影響で苦しんでいる福島の人々を、長崎はこれからも応援し続けます。

現在、国会では、国の安全保障のあり方を決める法案の審議が行われています。70年前に心に刻んだ誓いが、日本国憲法の平和の理念が、今揺らいでいるのではないかという不安と懸念が広がっています。政府と国会には、この不安と懸念の声に耳を傾け、英知を結集し、慎重で真摯な審議を行うことを求めます。

被爆者の平均年齢は今年80歳を超えました。日本政府には、国の責任において、被爆者の実態に即した援護の充実と被爆体験者が生きているうちの被爆地域拡大を強く要望します。

原子爆弾により亡くなられた方々に追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は広島とともに、核兵器のない世界と平和の実現に向けて、全力を尽くし続けることを、ここに宣言します。

2015年(平成27年)8月9日

長崎市長 田 上 富 久

- 49 ページ 4 行目 「後障害」
8 行目 「日本国憲法における平和の理念」
13 行目 「東京をはじめ多くの街を破壊した空襲」
23 行目 「核兵器廃絶の署名」
28 行目 「核不拡散条約 (NPT) 再検討会議」
32 行目 「国連総会」
「核兵器禁止条約」
50 ページ 5 行目 「核抑止力」
6 行目 「北東アジア非核兵器地帯」
8 行目 「世界こども平和会議」

1. 後障害

原爆による放射線障害は、急性障害と後障害にわけられます。急性障害は大量の放射線を浴びたときに出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症し、多くの人が死亡しました。

後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる症状で、がんや白血病、白内障などがあります。昭和 21 (1946) 年初めから、火傷が治ったあとが盛り上がるケロイド症状が現れました。また、母親の胎内で被爆した胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れても小頭症などの症状が現れることもありました。さらに、昭和 25 (1950) 年頃からは、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなど様々な病気の発生率が高くなり始めました。

放射線が年月を経て引き起こす影響については、未だ十分に解明されておらず、調査や研究が今も続けられています。

2. 日本国憲法における平和の理念

日本国憲法の前文には、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し」、また「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」とうたっています。

その決意を実現するため、第 9 条第 1 項では、戦争の放棄をうたっています。日本国民の恒久平和の願いが不戦と平和の理念となっています。

3. 東京をはじめ多くの街を破壊した空襲

第二次世界大戦末期には、東京、名古屋、大阪、神戸、福岡などの都市部を標的とした爆撃により、無差別に多くの人が被害を受けました。

特に東京は、昭和 19 (1944) 年 11 月 24 日以後、終戦まで、アメリカ軍の B29 型機によって度々爆撃を受け、昭和 20 (1945) 年 3 月 10 日の大空襲では、わずか 2 時間あまりに 10 万人の死者、11 万人の負傷者を出し、100 万人以上が家を失いました。

また、3 月 13 日には大阪も大空襲を受け、3 千人以上が死亡しました。終戦までに受けた空襲も合わせると、1 万人以上が亡くなったといわれています。

4. 核兵器廃絶の署名

平成 27 (2015) 年 7 月現在、世界 160 か国・地域の 6,733 都市が加盟し、平成 32 (2020) 年までの核兵器廃絶を目指す平和首長会議は、平成 22 (2010) 年 12 月から「核兵器禁止条約 (P20 参照)」の早期実現を目指した署名活動に取り組んでおり、署名の累計は 200 万筆を超えています。今年 4 月には、約 110 万筆の署名の目録をニューヨークの国連本部に届けました。

また、「ビリョクだけどもリョクじゃない」を合言葉に、署名活動が続いている高校生たちもいます。高校生が 1 年をかけて集めた署名は、平成 13 (2001) 年から毎年、ジュネーブの国連欧州本部に届けられています。

5. 核不拡散条約 (NPT) 再検討会議

(1) 核不拡散条約

核不拡散条約 (NPT) は、核保有国が増える(核が拡散する)ことを防ぐ目的でつくられた条約で、昭和 45 (1970) 年に発効しました。平成 15 (2003) 年 1 月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スーダンの 4 か国を除く 191 か国・地域が加盟しています。

主な内容は、昭和42(1967)年1月時点で核兵器を保有していたアメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の5か国だけに核兵器の保有を認め(核保有国)、それ以外の国(非核保有国)が保有することを禁止しています。

核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

また、非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関(IAEA)の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発しているのではないかと疑いを抱えているほか、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約内容に各国が真剣に取り組むことに加え、核兵器禁止条約など新たな取り組みも求められています。

(2) 再検討会議

核不拡散条約(NPT)では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。

平成12(2000)年の再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、平成17(2005)年の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果を得ることなく閉幕しました。

平成22(2010)年の再検討会議は前年にアメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催され、「核兵器のいかなる使用も人道上、破壊的な結果をもたらすことを深く憂慮する」と核兵器の非人道性が明記された核軍縮に向けた64項目の行動計画を柱とする最終文書が採択されました。

平成27(2015)年の再検討会議は、4月27日から5月22日までニューヨークの国連本部で開催されました。最終文書は採択されないまま閉幕しましたが、参加国の多くが核兵器の非人道性に言及し、核兵器禁止に向けた法的枠組

みについての議論を速やかに開始すべきであると訴えました。また、提示された文書案には、「すべての国々に対し、被爆した人々及び地域とやりとりし、その経験を直接共有する」という内容が盛り込まれ、「被爆地訪問の重要性」が多くの国々に共有され、今後につながる会議となりました。

6. 国連総会

ニューヨークの国連本部で全加盟国の参加の下、開催される国際連合の会議のことです。国際連合憲章に定められた問題を話し合い、加盟国と安全保障理事会に対して勧告することができます。通常会期は、毎年9月第3火曜日から12月半ばまでですが、必要に応じ延長されることもあります。

平成25(2013)年の国連総会第一委員会で、ニュージーランドが発表した「核兵器の人道上の影響に関する共同声明」には、日本を含む125か国が賛同しました。

平成26(2014)年にも同趣旨の共同声明が発表され、日本を含む155か国が賛同しました。

今年も9月15日から開催される予定で、特に今年は核兵器禁止の法的枠組みなど、核保有国と非核保有国の対立を越える議論が期待されます。

7. 核兵器禁止条約

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約です。

核兵器禁止条約は、国際司法裁判所(ICJ)が平成8(1996)年に「核兵器の使用・威嚇は一般的に国際法に違反する」とした勧告的意見が始まりとなりました。

平成9(1997)年に国際反核法律家協会など3団体が、「核兵器は違法」とする考えに基づいて、モデル核兵器禁止条約の案を発表し、同じ年にコスタリカ政府が国連に提出しました。

平成19(2007)年には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会及び国連総会に改訂版の条約案を提出、平成20(2008)年には潘基文(パン・ギムン)国連事務総長も、核軍縮に関する5項目の提言を発表して、禁止条約の検討を加盟各国に求めています。

最近では、核兵器の使用や保有などを禁止する簡潔な核兵器禁止の法的枠組みに関して、さまざまな案が提唱されています。

8. 核抑止力

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとするために、核の拡散につながり、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

日本や韓国、NATO（北大西洋条約機構）の諸国はアメリカの核抑止力によって守られており、「核の傘の下にある」といいます。

これに対し、核抑止力に頼らない安全保障のあり方を、「非核の傘」ということもあります。長崎市は、その現実的で具体的な方法として、北東アジア非核兵器地帯を提案しています。

9. 北東アジア非核兵器地帯

条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束することを非核化といい、非核化された地域のことを「非核兵器地帯」といいます。この条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることにつながります。地球の南半球は、昭和42（1967）年のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器禁止条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、平成10（1998）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、平成21（2009）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

「北東アジア非核兵器地帯」とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、昭和46（1971）年に非核三原則の国会決議が行われ、また、韓国と北朝鮮による「朝鮮半島非核化共同宣言」が、平成4（1992）年に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、平成18（2006）年10月、北朝鮮が最初の核実験を実施し、さらに、平成21（2009）年5月に2回目を、平成25（2013）年2月に3回目の核実験を強行したことから、朝鮮半島の非核化の実現が困難な状況になりました。

北朝鮮の核を早急に放棄させるためにも、北東アジア非核兵器地帯の実現に向けて、日本政府や韓国政府が主導していく必要があります。

10. 世界こども平和会議

平成27（2015）年8月5日、6日、世界中の子どもたちと市内の中高生などが参加し、原爆の恐ろしさや平和の尊さを学ぶ世界こども平和会議が開かれました。

「過去を学び、現在を見つめ、明るい未来を描こう！」をコンセプトに開催されたこの会議では、原爆資料館の見学や被爆体験講話の聴講で「過去」を学び、参加国の現状報告や核兵器の講義などを通して「現在」について考え、グループワークで「未来」について意見を交わしました。参加した子どもたちにとって、この会議がスタートラインとなることで、世界中に長崎の平和の願いが伝わります。

◆ 市川市の平和事業について

市では、昭和59年（1984年）11月15日に核兵器のない平和な世界を願って「核兵器廃絶平和都市宣言」を行いました。平成元年には千葉県内で初めての「平和基金」を設立し、これまで様々な事業をとおして市民の皆様に「平和の大切さ」を呼びかけてまいりました。戦後70年が経過し、戦争の記憶の風化が心配される中、今後も引き続き平和意識の高揚と啓発に取り組んでまいります。

★ ☆お も な 平 和 事 業 ☆ ★

- **折 り 鶴 募 集**・・・毎年広島・長崎で行われている平和記念（祈念）式典へ向けて、市民の方々が折った折鶴を「千羽鶴」にして、「平和への架け橋」となることを願い、両市へ送呈しています。
- **平和の折り鶴展**・・・市民の方々から寄せられた折鶴を広島・長崎市へ送呈するまでの期間に展示しています。
- **平 和 パネル展**・・・原爆投下日から終戦記念日にかけて、アイ・リンクタウンにおいてパネル展示を行っています。
- **平 和 寄 席**・・・「日常忘れかけている心のゆとり」と「笑いの絶えない明るい家庭」との観点から、笑いを通して「平和の大切さ」を訴えています。
- **平 和 ポ ス タ ー**・・・市内小・中学校に在学している児童、生徒の心でとらえた平和を訴える作品を募集しています。応募作品の中から24点を活用して「平和カレンダー」を作成、また「平和ポスター作品展」を開催し平和意識の高揚を図っています。
- **平 和 映 画 会**・・・小さなお子さんにもわかりやすい平和に因んだ映画を上映し、「平和の大切さ」を訴えています。
- **被 爆 体 験 講 話**・・・市川被爆者の会と連携し、小・中学校での被爆体験講話を実施しています。

○ ビデオ・パネルの貸出

* 市川市製作の平和に関する映像資料の貸出を行っています。

- ①「今、あなたに伝えたい」（VHS・DVD 30分）

東京大空襲を経験した市民と広島で被爆した市民の体験談を中心に収録。

- ②「忘れられない悲劇 私の被爆体験」（DVD 44分）

広島、長崎で被爆した市民（市川被爆者の会会員）の被爆体験講話。

※②は平成28年度から貸出開始。

* 「原爆と人間」等パネルの貸出を行っています。

被爆者の証言と写真を中心にした原爆展用パネル。

そのほか、中央図書館（メディアパーク市川内）の展示コーナーに原爆・戦争に関するパネルを展示しています。

平成27年度
終戦 70 周年事業

市川市平和学習青少年長崎派遣団報告書

平成28年2月発行

市川市 総務部 総務課

〒272-8501 市川市八幡1-1-1

TEL 047-334-1111(代表)

FAX 047-332-7364



『平和の像』

(平成6年、市川駅北口に設置 作者：堀川 恭 氏)